

- 1問を解答用紙1枚を使って解答して下さい。裏面を使っても良いです。
- 学籍番号と氏名はすべての解答用紙に記入して下さい。
- 途中の計算も必ず書いてください。
- 配点は予定です。

問1. 行列  $A$  を

$$A = \begin{pmatrix} 16 & -45 \\ 6 & -17 \end{pmatrix}$$

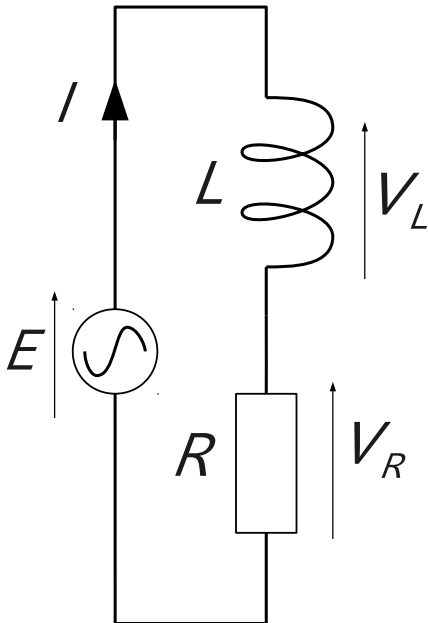
とおく。  $A$  の固有値と固有ベクトルを求め、変数  $t$  に対して、

$$e^{tA} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} t^n A^n$$

を求めよ。また、次の行列の余因子行列を求めよ。  
(10+5点)

$$\begin{pmatrix} 2 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 2 \\ 1 & 1 & -1 \end{pmatrix}$$

問2. 次のLR回路において  $\arg(E) = 0 \text{ rad}$  とし、(1)  $E$ ,  $V_L$ ,  $V_R$  をフェーザ図で示せ。(2)  $|E| \leq |V_L| + |V_R|$  が成立することを、(1)の結果を用いて説明せよ。(3)  $|E| = 100\text{V}$ ,  $R = 10\Omega$ ,  $L = 0.0001\text{H}$  とする。角周波数  $\omega$  に対する、抵抗にかかる電圧  $V_L$  のボード線図(振幅図と位相図)を図示せよ。なお、図内に重要な数値や補助線を書き込むこと。(5+5+5+5=20点)



問3. 区間  $[-\pi, \pi]$  で定義された次の関数  $x(t)$  を、複素数表示でフーリエ級数展開せよ。(係数を求める式と展開式の両方を示す。)(15点)

$$x(t) = \begin{cases} 1 & (-\frac{\pi}{2} \leq t \leq \frac{\pi}{2}) \\ 0 & (\text{else}) \end{cases}$$

問4. ラプラス変換に関する次の問いに答えよ。(5×8+10=50点)

(1) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = 3u(t) \quad (u(t): \text{単位ステップ関数})$$

(2) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = e^{2t}$$

(3) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = \sin 2t$$

(4) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = 5t^3$$

(5) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = \begin{cases} 0 & (t < 3) \\ 3e^{2t} & (t \geq 3) \end{cases}$$

(6) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = t \cos 2t$$

(7) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = e^{-3t} \cos 2t$$

(8) 次の関数をラプラス変換しなさい。

$$f(t) = e^{-3t} t \cos 2t$$

(9) 次の関数を、部分分数展開を使って逆ラプラス変換しなさい(その導出過程を詳しく書くこと)。

$$F(s) = \frac{2s^2 + 16s + 26}{(s+1)(s+3)^2}$$

解答例

問 1.

固有値は,

$$\det(\lambda I - A) = 0$$

より,

$$0 = \begin{vmatrix} \lambda - 16 & 45 \\ -6 & \lambda + 17 \end{vmatrix} = (\lambda - 16)(\lambda + 17) - (-6)(45) = \lambda^2 + \lambda - 2 = (\lambda + 2)(\lambda - 1)$$

となり, 固有値は 1 と -2 となる。

固有値 1 に対する固有ベクトルは,

$$\begin{pmatrix} 1 - 16 & 45 \\ -6 & 1 + 17 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -15 & 45 \\ -6 & 18 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = 0$$

より, 例えば,

$$\begin{pmatrix} 3 \\ 1 \end{pmatrix}$$

で与えることができる。固有値 -2 に対する固有ベクトルは,

$$\begin{pmatrix} -2 - 16 & 45 \\ -6 & -2 + 17 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -18 & 45 \\ -6 & 15 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = 0$$

より, 例えば,

$$\begin{pmatrix} 5 \\ 2 \end{pmatrix}$$

で与えることができる。

$$P = \begin{pmatrix} 3 & 5 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$$

とおけば,

$$P^{-1} = \begin{pmatrix} 2 & -5 \\ -1 & 3 \end{pmatrix}$$

となる。

$$A = P \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix} P^{-1}$$

が成立する。従って,

$$\begin{aligned} e^{tA} &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} t^n A^n \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left[ P \begin{pmatrix} t & 0 \\ 0 & -2t \end{pmatrix} P^{-1} \right]^n \\ &= P \begin{pmatrix} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} (t)^n & 0 \\ 0 & \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} (-2t)^n \end{pmatrix} P^{-1} \\ &= P \begin{pmatrix} e^t & 0 \\ 0 & e^{-2t} \end{pmatrix} P^{-1} \\ &= \begin{pmatrix} 3 & 5 \\ 1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2e^t & -5e^t \\ -e^{-2t} & 3e^{-2t} \end{pmatrix} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 6e^t - 5e^{-2t} & -15e^t + 15e^{-2t} \\ 2e^t - 2e^{-2t} & -5e^t + 6e^{-2t} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

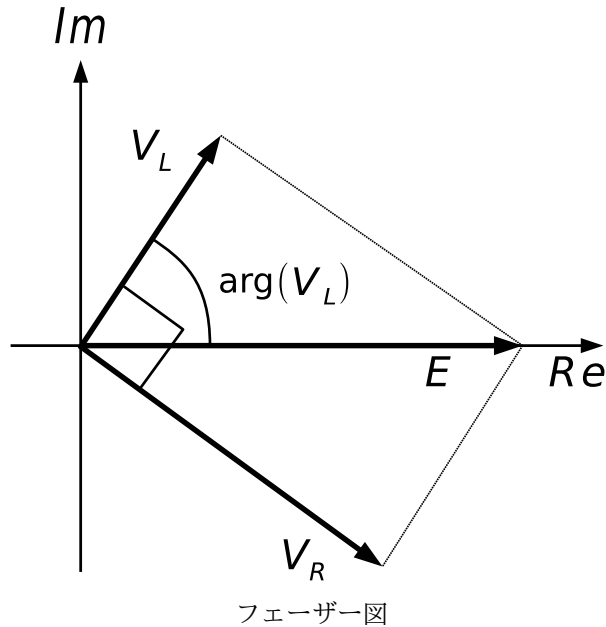
となる。

余因子行列は

$$\begin{pmatrix} \begin{vmatrix} 2 & 2 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} \\ -\begin{vmatrix} -2 & -1 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 2 & -1 \\ 1 & -1 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 2 & -2 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} -2 & -1 \\ 2 & 2 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 2 & -1 \\ 1 & 2 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 2 & -2 \\ 1 & 2 \end{vmatrix} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -4 & 3 & -1 \\ -3 & -1 & -4 \\ -2 & -5 & 6 \end{pmatrix}$$

問 2.

(1)

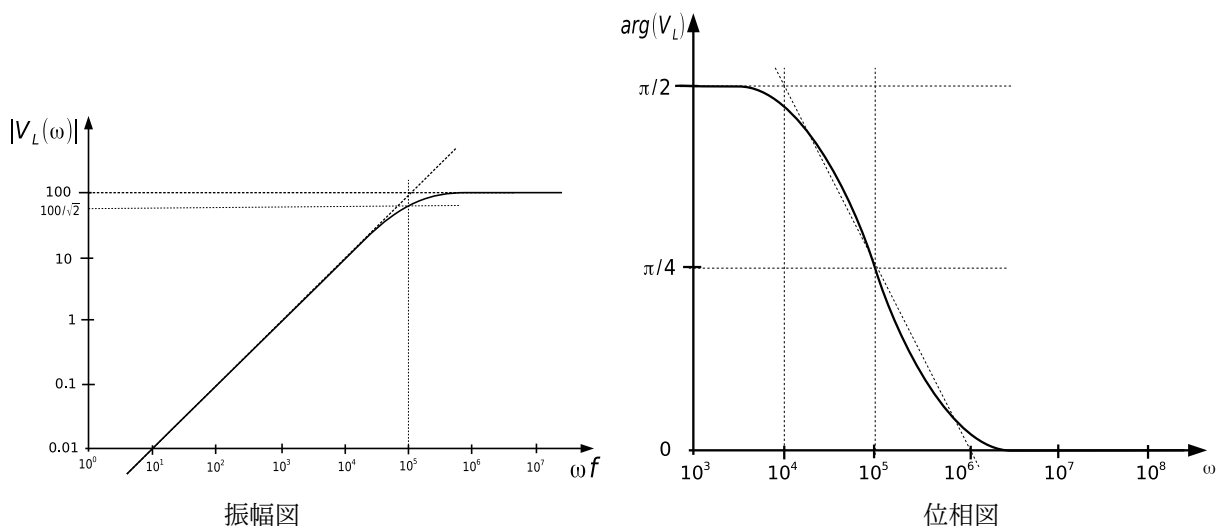


(2)

たとえば、 $V_L$  を  $V_R$  の先端までの平行移動させれば、 $E$ ,  $V_R$ ,  $V_L$  を平行移動したもので三角形をなすことができる。それぞれの辺の長さが  $|E|$ ,  $|V_R|$ ,  $|V_L|$  となるから、三角不等式より、 $|E| \leq |V_R| + |V_L|$  となる。

等号が成立する場合は、三角形を形成しない場合であるから、 $V_L = 0$  または  $V_R = 0$  であり、 $L = 0$  または  $R = 0$  または  $\omega = 0$  または  $|E| = 0$  である。

(3)



$V_L$  は、

$$V_L = \frac{i\omega LE}{R + i\omega L}$$

となる。  $\omega_0 = \frac{R}{L} = 10^5 \text{rad/s}$  とおく。  $V_L$  の振幅は、

$$|V_L| = \frac{\omega L |E|}{\sqrt{R^2 + (\omega L)^2}} = \frac{|E|}{\sqrt{1 + \frac{\omega_0^2}{\omega^2}}}$$

となる、  $\omega \gg \omega_0$  で  $|V_L|$  は  $|E|$  で一定である。  $\omega \ll \omega_0$  では、

$$|V_L| \simeq \frac{\omega}{\omega_0}$$

と近似できるので、振幅図では傾き 1 の直線になる。  $\omega = \omega_0$  はカットオフ周波数で、

$$|V_L| = \frac{E}{\sqrt{2}}$$

となる。これらの部分を滑らかにつなげばよい。

位相は、

$$\arg(V_L) = \arg(E) - \arg\left(1 - i\frac{\omega_0}{\omega}\right) = \tan^{-1} \frac{\omega_0}{\omega}$$

となる。となる、  $\omega \ll \omega_0$  で  $\arg(V_L)$  は  $\pi/2$  で一定である。  $\omega \gg \omega_0$  で  $\arg(V_L)$  は 0 で一定である。また、  $\omega = 0.1\omega_0$  で  $\arg(V_L) \simeq \pi/2 - 0.1$ 、  $\omega = \omega_0$  で  $\arg(V_L) = \pi/4$ 、  $\omega = 10\omega_0$  で  $\arg(V_L) \simeq 0.1$  となる。これらの部分を滑らかにつなげばよい。

問 3.

$n = 0$  のときは、

$$c_0 = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x(t) dt = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi/2}^{\pi/2} 1 dt = \frac{1}{2}$$

$n \neq 0$  のときは、

$$\begin{aligned} c_n &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} g(t) e^{-\frac{2\pi i}{2\pi} n t} dt \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi/2}^{\pi/2} e^{-int} dt \\ &= \frac{1}{2\pi} \left[ \frac{-1}{in} e^{-int} \right]_{-\pi/2}^{\pi/2} \\ &= \frac{1}{2\pi in} \left( -e^{-in\pi/2} + e^{in\pi/2} \right) \\ &= \frac{1}{\pi n} (\sin(n\pi/2)) \\ &= \begin{cases} 0 & (n \text{ is even}) \\ \frac{(-1)^k}{\pi n} & (n = 2k + 1) \end{cases} \end{aligned}$$

となる。従って次式が成立する。

$$g(t) = \frac{1}{2} + \frac{1}{\pi} \sum_{k=-\infty}^{\infty} \frac{(-1)^k}{2k+1} e^{i(2k+1)t}$$

展開係数が 0 となるのは、  $n$  が 0 以外の偶数になるときである。

問 4.

(1)

$$F(s) = \frac{3}{s}$$

(2)

$$F(s) = \frac{1}{s-2}$$

(3)

$$F(s) = \frac{2}{s^2+4}$$

(4)

$$F(s) = \frac{30}{s^4}$$

(5)

$3e^6 e^{2t}$  を  $t$  方向に 3 だけ平行移動したものである。

$$F(s) = \frac{3e^6 e^{-3s}}{s-2}$$

(6)

$$F(s) = -\frac{d}{ds} \frac{s}{s^2+4} = -\frac{s^2+4-s(2s)}{(s^2+4)^2} = \frac{s^2-4}{(s^2+4)^2}$$

(7)

$$F(s) = \frac{s+3}{(s+3)^2+4} = \frac{s+3}{s^2+6s+13}$$

(8)

$$F(s) = -\frac{d}{ds} \frac{s+3}{s^2+6s+13} = -\frac{s^2+6s+13-(s+3)(2s+6)}{(s^2+6s+13)^2} = \frac{s^2+6s+5}{(s^2+6s+13)^2}$$

(9)

まず、部分分数展開を行う。

$$F(s) = \frac{2s^2+16s+26}{(s+1)(s+3)^2} = \frac{a}{s+1} + \frac{b}{s+3} + \frac{c}{(s+3)^2}$$

とおくと、

$$\begin{aligned} & \frac{a}{s+1} + \frac{b}{s+3} + \frac{c}{(s+3)^2} \\ &= \frac{a(s+3)^2 + b(s+1)(s+3) + c(s+1)}{(s+1)(s+3)^2} \\ &= \frac{(a+b)s^2 + (6a+4b+c)s + (9a+3b+c)}{(s+1)(s+3)^2} \end{aligned}$$

となるので、次の連立方程式が成立する。

$$\begin{cases} a+b = 2 \\ 6a+4b+c = 16 \\ 9a+3b+c = 26 \end{cases}$$

これを解くと、 $a=3, b=-1, c=2$  となる。従って、

$$F(s) = \frac{3}{s+1} + \frac{-1}{s+3} + \frac{2}{(s+3)^2}$$

となるので、

$$f(t) = 3e^{-t} - e^{-3t} + 2te^{-3t}$$

となる。